

# ピアノ学習初心者へのMLシステムを活用した指導法と実践 —音楽実習 I を通して—

Teaching methods introducing the ML System for beginning piano learners  
—Music Practice I—

澤田悦子	片寄ますみ	鈴木佳代
Etsuko SAWADA	Masumi KATAYOSE	Kayo SUZUKI

## I はじめに

幼児や児童の音楽教育には、表現する力・聴く力・感じる力を育み、豊かな情操を養うことが求められている。さらに保育者・教育者が鍵盤楽器を弾けるということは、音楽教育の一要素であり、保育・教育の現場では演奏に加え、歌の伴奏としてもピアノを使用した指導が必要とされている。

しかしながら、近年、教員養成校における入学生の鍵盤楽器の学習経験が、未経験または経験はあるがピアノ指導者のレッスンを受けなくなってから数年経過している学生が少なくない。

幼児教育における鍵盤楽器は、主に歌の伴奏として、弾き歌いや範唱・範奏の技能と表現力が求められる。小学校教育では、児童が音楽を感じ取り、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図を持って演奏することが大切となる。指導者は、主な使用鍵盤楽器である鍵盤ハーモニカ、オルガン、アコーディオン、ピアノ、電子キーボード等の演奏指導と共に、歌唱共通教材を使用した伴奏、歌唱指導と範唱・範奏の技能力が求められている<sup>(1)</sup>。

本来、ピアノを演奏するという事は、音楽知識や技術の習得のため練習を積み重ね、習熟していくものであり、個人差はあるが、その習熟には多くの時間が必要である。更に、教育現場では、子ども達へ音楽の楽しさや素晴らしさを伝えるため、表現力豊かな演奏が求められている。ピアノ学習初心者の学生は、限られた期間で可能な限り技術を習得し、音楽表現力を身に付けるべく練習を積み重ねる努力をしなければならない。

教員養成校の多くは、個人指導や集団指導を行っており、履修期間も1年、1年半、2年間と様々である<sup>(2)</sup>。本学では、KMLシステム（KAWAI MUSIC LESSON 以下MLシステムとする）の活用による集団のピアノ指導を前学期・後学期通して1年間実施している。MLシステムとは、少人数による集団音楽学習を効率よく進められる指導法である。個人指導は、学生個々のレベルに合わせて指導できる利点がある。しかし、1人に割り当てられたレッスン時間内でピアノ学習初心者の問題点を克服するには時間が足りず、限界もある。

本研究では、ピアノ学習初心者へMLシステムを活用した指導を前学期科目の音楽実習 I で実践し、学生の音楽力向上とその指導法を検討した。

## II 方法

### 1. 「音楽実習Ⅰ」ピアノ実技演習

音楽実習Ⅰでは、ピアノ実技演習を1年前期に行い、集団指導と進度に応じた個人指導としている。

### 2. 履修目標

初心者の場合、音楽実習Ⅰの履修目標は基礎知識、ピアノの演奏基礎技能の習得、音楽に対する意欲の向上を目指す。初心者の楽曲教材は、バイエルである。経験者は、個別習熟度レベルに応じてブルグミュラー25の練習曲、ソナチネアルバム1・2から学習する。歌唱教材は、小学校共通教材学習と童謡、唱歌の伴奏法を学び、取り扱いの意義と教材研究、指導法を実習する。

### 3. 歌唱教材

#### (1) 幼児教育コース歌唱教材

朝のうた、あくしゅでこんにちは、どこでしょう、おかえりのうた、よがあげた、おべんとう  
小学校共通教材

第1学年 うみ、かたつむり、日のまる、ひらいたひらいた

第2学年 かくれんぼ、春がきた、虫のこえ、夕やけこやけ

#### (2) 初等教育コース

第1学年 うみ、かたつむり、日のまる、ひらいたひらいた

第2学年 かくれんぼ、春がきた、虫のこえ、夕やけこやけ

第3学年 うさぎ、茶つみ、春の小川、ふじ山

第4学年 さくらさくら、とんび、まきばの朝、もみじ

### 4. 音楽実習Ⅰ MLシステム集団指導の展開方法

#### (1) 環境

本学は、ML指導室（個別指導教室）とML教室（集団指導教室）が隣接しており、隣接壁の1部はガラス窓で仕切られ、両教室の学生の様子を把握しやすい構造となっている。個別指導室は、防音室でグランドピアノ1台とトムソン椅子2脚、パイプ椅子複数脚、長机1台が設置されている。ML教室は、マスター電子ピアノ1台（指導者用楽器）と他16台の電子ピアノ（学生用楽器）が接続されており、各電子ピアノにはヘッドフォン2個、高低可動椅子と高低固定椅子が1脚ずつセットされている。マスターユニットの電源をONにしなければ学生用電子ピアノは接続されない。演奏する楽器の音はヘッドフォンを通してのみ聞く事と指導している。従って、其々が練習する際に、他者の弾く電子ピアノ音が聞こえて演奏や練習に支障をき

たすという事がなく、自己研鑽に励むことが出来る。

## (2) 指導展開方法

ML指導室とML教室それぞれに1名ずつ教員が配置され、個別レッスン・弾き歌いと歌唱レッスン・自主練習の3つのグループに分けた展開で、指導している。ML指導室では、1名の学生がバイエルと弾き歌い曲のレッスンを受講し、同じグループ内の他の学生達はレッスンを聴講している。ML教室では、2つのグループの指導を展開している。マスターピアノで弾き歌いの歌唱と伴奏指導を行うが、範唱や範奏は教員だけでなく学生にも取り組ませている。もう1つのグループは各自の進度に合わせてバイエルと弾き歌い曲の自主練習に取り組み、わからない点や演奏に困難を感じている点を指導者に伝え、その都度、指導を受けている。

## 5. 進捗表

進捗表は、学生が毎週レッスンを受ける曲と担当教員の指導を受けて学習する内容や課題を記入している。現在の進捗の把握と振り返りの確認をすることができ、次回までの課題を明確にして練習に励むことが出来る。

## 6. 調査対象・時期

音楽実習Ⅰの講義を履修している教育学科1年の学生を対象としている。調査により、初等教育コースのアンケートは51名、幼児教育コースのアンケートは23名から回答を得られた。

## 7. 調査方法

調査は、音楽実習Ⅰで2回実施し、無記名によるアンケート形式で選択項目と自由記述の内容で行った。

## 8. 調査内容項目

(1) 入学直後に、7つの質問項目から現在のピアノ学習経験や進捗を調査した。

- ①入学前の鍵盤楽器の学習経験の有無、学習期間については、継続中の場合、何年くらい学習しているのか、学習経験はあるがやめている場合は、やめてから何年くらい経過しているのか、を記述する。
- ②鍵盤楽器の学習経験年数については、1年未満(12カ月未満)、1年、2～4年、5～9年、10年以上、から選択し記述する。
- ③学習していた鍵盤楽器については、ピアノ、電子オルガン、キーボード、オルガン、その他の楽器、から選択し記述する。
- ④学習経験がある場合、どのような指導者から指導を受けたのかについては、音楽教室・個人のピアノ教室、学校の音楽教員、親・兄弟・姉妹・親戚・独学、その他があれば記述する。

- ⑤現在の住居での練習用鍵盤楽器の有無については、自宅にある、自宅にない、から選択する。実家から離れている場合は現在居住している住居で考えて記述する。楽器が有る場合は、ピアノ、電子オルガン、キーボード、オルガン、その他の楽器、から選択し記述する。無い場合は、自宅以外の練習場所の楽器、練習用の楽器が無い、から選択し記述する。
- ⑥鍵盤楽器学習経験者の学習した楽曲・テキストについては、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネの学習経験を記入する。曲名、作品番号などがわからない場合は、テキスト名を選択し記述する。学習未経験者は、全くないを選択する。
- ⑦第1回目の講義で弾く予定の曲がある場合、バイエル、ブルグミュラー25の練習曲、ソナチネアルバム1・2、ソナタアルバム1・2、から選択する。提示した曲以外の場合は、その他、に記入する。弾く予定がない場合は、弾かないを選択する。
- (2) 前期実技試験前に、5つの質問項目からピアノ演奏と弾き歌いの上達度や達成感などの調査を行った。
- ①入学後は、どのような楽器を使用して練習をしたか、については、ピアノ、電子オルガン、キーボード、オルガン、大学(練習室)のみ、大学と自宅、実家に楽器はあるが遠方のため新たに練習用楽器を購入した、から選択する。楽器を購入した場合は楽器名も記入する。
- ②ピアノを弾く時、歌う時どのような難しさを感じているか、難しいと感じている事を3つまで記入してください、については、譜読み、指使い、両手奏、指が動かない、音のミスがわからない、リズムがわからない、進度表の活用の仕方がわからない、歌い方がわからない、弾きながら歌うこと、練習の仕方、曲の速さ(テンポ)がわからない、楽典(記号、強弱、拍子、調性、#bなど)、その他があれば自由記述する。
- ③上達したと感じている事を3つまで記入してください、については、譜読み、指使い、両手奏、指が動く・4指5指のタッチがしっかりしてきた、音のミスがわかる、リズムがわかる、進度表の活用の仕方がわかる、歌い方がわかる、弾きながら歌える、練習の仕方がわかる、曲の速さ(テンポ)がわかる、楽典(記号、強弱、拍子、調性、#bなど)、から選択し、その他があれば自由記述する。
- ④前期の目標は達成できましたか、については、目標を記入し、達成できた、まあまあ達成できた、少し達成できた、達成できない、全く達成できない、から選択する。
- ⑤夏休み中のピアノと弾き歌いの目標と目標を達成する為の取り組み計画を記入してください。

### Ⅲ 結果

教育学科の初等教育コース51名と幼児教育コース23名、合わせて74名に、音楽実習Ⅰにおけるアンケート調査を行い、回答を得た。

(1) 入学前の鍵盤楽器の学習状況を把握する為に、7項目のアンケート調査を行った。

①入学前の鍵盤楽器の学習経験の有無は、

「経験あり」が23名 (31.0%)、「経験なし」が51名 (69.0%) であった (表1)。

②「経験あり」の中でも、学習経験年数は「ブランクあり」も含め、1年未満は2名 (8.7%)、1年は1名 (4.3%)、2～4年は7名 (30.4%)、5～9年も7名 (30.4%)、10年以上は6名 (26.0%) となっている (表2)。

③学習していた鍵盤楽器は、ピアノが21名 (91.3%) と多く、次に鍵盤ハーモニカ4名 (17.3%)、電子オルガン・エレクトーン共に2名 (8.7%) であった (表3)。

④鍵盤楽器の指導者については、音楽教室・個人のピアノ教室が17名 (23.0%)、学校の音楽教員が6名 (8.1%)、親・兄弟・姉妹・親戚・独学は各2名 (2.7%) であり、その他は2名 (2.7%) であった (表4)。

⑤自宅の鍵盤楽器の有無については、「自宅にある」が25名 (33.8%)、「自宅にない」は47名 (63.5%) であった。さらに自宅にある楽器の種類については、ピアノ8名 (10.8%)、電子オルガン4名 (5.4%)、キーボード11名 (14.9%)、自宅以外の練習場として実家が2名 (2.7%) であった。未回答は3名 (4.0%) で詳細は不明である (表5)。

⑥バイエル、ブルグミュラー25の練習曲、ソナチネ、ソナタの学習経験については、バイエルが6名 (8.1%)、ブルグミュラー25

表1 入学前の鍵盤楽器の学習経験の有無 [名(%)]

経験あり	23 (31.0%)
経験なし	51 (69.0%)

表2 学習経験ありのブランク年数 [名(%)]

1年未満	2 (8.7%)
1年	1 (4.3%)
2～4年	7 (30.4%)
5～9年	7 (30.4%)
10年以上	6 (26.0%)

表3 学習していた鍵盤楽器 [名(%)]

ピアノ	21 (91.3%)
鍵盤ハーモニカ	4 (17.3%)
電子オルガン	2 (8.7%)
エレクトーン	2 (8.7%)

表4 鍵盤楽器の指導者 [名(%)]

音楽教室・個人ピアノ教室	17 (23.0%)
学校の教員	6 (8.1%)
親・兄弟・姉妹・親族・独学	2 (2.7%)
その他	2 (2.7%)

表5 自宅の鍵盤楽器の有無と種類 [名(%)]

自宅にある	25 (33.8%)
自宅にない	47 (63.5%)
ピアノ	8 (10.8%)
電子オルガン	4 (5.4%)
キーボード	11 (14.9%)
自宅以外の場所(実家)	2 (2.7%)
未回答	3 (4.0%)

の練習曲とソナチネは共に3名(4.0%)、ソナタは2名(2.7%)であった。また、「全く学習経験がない」は、60名(81.0%)とかなり多く、バイエルの学習経験者も含めると89.1%、約9割の学生が初心者であることがわかる(表6)。

- ⑦第1回目の講義で弾く予定曲については、「分からない」、「未定」は共に2名(2.7%)、「簡単な曲」、「トルコ行進曲」は共に1名(1.4%)、「弾かない」は50名(67.6%)であった。未回答は18名(24.3%)であった(表7)。特に演奏曲を指定したわけではないため、弾かないと回答した学生もいたが、意欲的に選曲した学生もいた。

- (2) 前期実技試験前に、5つの質問項目からピアノ演奏と弾き歌いの上達度や達成感などのアンケート調査を実施した。

- ①入学後は、どのような楽器を使用して練習をしたかの質問に、ピアノは17名(27.8%)、電子オルガン16名(26.2%)、キーボード27名(44.2%)、オルガン0名(0.0%)で、キーボードの使用が1番多く、次いでピアノ、電子オルガンがほぼ同数であった。練習している場所は大学(練習室)のみが18名(29.5%)、大学と自宅が26名(42.6%)、自宅に楽器はあるが遠方のため楽器を購入したは2名(3.2%)である。新たに楽器を購入した場合は楽器名を記入する、については、キーボードという回答であった。(表8)。
- ②ピアノを弾く時、歌う時どのような難しさを感じていますか、難しいと感じている事を3つまで記入してくださいの項目では、1番難しさを感じていたのは両手奏で15名(24.5%)で、次に譜読み12名(19.6%)である。2番目に難しく感じた事は、指使い13名(21.3%)であり、譜読み、指が動かない・4指5指のタッチが弱い、弾きながら歌詞をつけて歌うことの3項目がそれぞれ6名(9.8%)であった。3番目として指が動かない・4指5指のタッチが弱い、弾きながら歌詞をつけて歌うことが各8名(13.1%)であり、次いで曲の速さ(テンポ)がわからないが7名(11.4%)となった(表9)。
- ③前期で上達したと感じるのはどのようなことですか、上達したと思う事を3つまで記入し

表6 楽曲の経験 [名(%)]

バイエル	6 ( 8.1%)
ブルグミュラー	3 ( 4.0%)
ソナチネ	3 ( 4.0%)
ソナタ	2 ( 2.7%)
全く学習経験がない	60 (81.0%)

表7 第1回目の講義で弾く予定曲 [名(%)]

分からない	2 ( 2.7%)
未定	2 ( 2.7%)
簡単な曲	1 ( 1.4%)
トルコ行進曲	1 ( 1.4%)
弾かない	50 (67.6%)
未回答	18 (24.3%)

表8 入学後はどのような楽器を使用して練習しましたか(複数回答可) [名(%)]

ピアノ	17 (27.8%)
電子オルガン	16 (26.2%)
キーボード	27 (44.2%)
オルガン	0 ( 0.0%)
大学(練習室)のみ	18 (29.5%)
大学と自宅	26 (42.6%)
自宅に( )はあるが遠方の為( )を購入した。	2 ( 3.2%)

表9 ピアノを弾く時、歌う時どのような難しさを感じていますか [名(%)]

	1	2	3
譜読み・ト音記号譜・ヘ音記号譜・大譜表	12 (19.6%)	6 (9.8%)	1 (1.6%)
指使い	6 (9.8%)	13 (21.3%)	4 (6.5%)
両手奏	15 (24.5%)	5 (8.1%)	4 (6.5%)
和音奏	1 (1.6%)	0 (0.0%)	3 (4.9%)
レガート奏	1 (1.6%)	2 (3.2%)	0 (0.0%)
指が動かない・4指, 5指のタッチが弱い	4 (6.5%)	6 (9.8%)	8 (13.1%)
音のミスがわからない	0 (0.0%)	1 (1.6%)	0 (0.0%)
リズムがわからない	1 (1.6%)	3 (4.9%)	4 (6.5%)
進度表の活用の仕方がわからない	0 (0.0%)	3 (4.9%)	0 (0.0%)
歌い方・発声の仕方がわからない	4 (6.5%)	2 (3.2%)	3 (4.9%)
弾きながら歌詞をつけて歌うこと	5 (8.1%)	6 (9.8%)	8 (13.1%)
練習の仕方	1 (1.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
曲の速さ(テンポ)がわからない	2 (3.2%)	3 (4.9%)	7 (11.4%)
曲のイメージがつかめない	1 (1.6%)	2 (3.2%)	1 (1.6%)
楽典(記号, 強弱, 拍子, 調性, #, bなど)	6 (9.8%)	5 (8.1%)	6 (9.8%)
その他・自由記述	1 (1.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

てくさいの項目では、1番が両手奏19名(31.1%)で、次に指使いの上達が12名(19.6%)であった。2番目に上達したと感じているのは、両手奏12名(19.6%)、次に音のミスがわかる8名(13.1%)で、聴音力の上達が見られた。3目番には、弾きながら歌詞をつけて歌うことが11名(18.0%)であり、次に指使い8名(13.1%)であった。難しさを感じていることと上達したと感じていることがほぼ同じ項目であった。殆どが、演奏に関わる基本的なことであり、知識や表現力に関わる項目については、まだ難しさや上達が判断できない、実感していなかった(表10)。

- ④前期の目標は達成できましたか、の項目では、基本演奏に関わる「全く弾いたことがないので、ピアノに慣れる」「両手奏に慣れる」「弾き歌いが出来るようになる」、表現力では「スムーズに演奏出来るようになる」「はっきり聴こえるように歌う」という目標を意識してピアノや弾き歌いに取り組んでいた(表11)。この目標を達成できたかについては、できたが23名(37.7%)であった。できた理由として「1日30分ほど練習できた」「練習をしてレパートリーが増えた」「自分なりの覚え方を作った」「何度も反復練習を行った」「指が柔らかく動くようになってきた」「声が出るようになってきた」など練習することにより自己実現を目指していた(表11-1)。少しできたは33名(54.0%)であり、理由として「自分からピアノに取り組む事で改善できた」「学校でしっかりと練習が出来た」「高音部譜表や低音部譜表の読譜に自信がない」「スムーズな演奏とまではいかなかった」「弾き

表10 前期で上達したと感じたことはどのようなことですか [名(%)]

	1	2	3
譜読み・ト音記号譜・ヘ音記号譜・大譜表	5 ( 8.1%)	2 ( 3.2%)	4 ( 6.5%)
指使い	12 (19.6%)	7 (11.4%)	8 (13.1%)
両手奏	19 (31.1%)	12 (19.6%)	3 ( 4.9%)
和音奏	1 ( 1.6%)	1 ( 1.6%)	0 ( 0.0%)
レガート奏	1 ( 1.6%)	0 ( 0.0%)	1 ( 1.6%)
指が動く・4指5指のタッチがしっかりしてきた	1 ( 1.6%)	5 ( 8.1%)	1 ( 1.6%)
音のミスがわかる	2 ( 3.2%)	8 (13.1%)	2 ( 3.2%)
リズムがわかる	0 ( 0.0%)	5 ( 8.1%)	6 ( 9.8%)
進度表の活用の仕方がわかる	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)	3 ( 4.9%)
歌い方・発声の仕方がわかる	1 ( 1.6%)	4 ( 6.5%)	4 ( 6.5%)
弾きながら歌詞をつけて歌うこと	1 ( 1.6%)	7 (11.4%)	11 (18.0%)
練習の仕方	6 ( 9.8%)	5 ( 8.1%)	1 ( 1.6%)
曲の速さ(テンポ)が変わる	0 ( 0.0%)	2 ( 3.2%)	2 ( 3.2%)
曲のイメージがつかめる	7 (11.4%)	2 ( 3.2%)	5 ( 8.1%)
楽典(記号, 強弱, 拍子, 調性, #, bなど)	1 ( 1.6%)	1 ( 1.6%)	1 ( 1.6%)
その他・自由記述	1 ( 1.6%)	0 ( 0.0%)	0 ( 0.0%)

表11 前期ピアノ学習目標 [名(%)]

基本演奏	表現力
<ul style="list-style-type: none"> <li>・全く弾いた事がないので、ピアノに慣れる。</li> <li>・両手奏に慣れる。</li> <li>・弾き歌いが出来るようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スムーズに演奏出来るようになる。</li> <li>・はっきり聴こえるように歌う。</li> </ul>
・できた23 (37.7%)	・少しできた33 (54.0%)
	・できない 5 ( 8.1%)

表11-1 目標達成の理由 [名(%) ]

できた 23 (37.7%)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1日30分ほど、練習できた。</li> <li>・自分なりの覚え方を作った。</li> <li>・指が柔らかく動くようになってきた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習をして、レパートリーが増えた。</li> <li>・何度も、反復練習を行った。</li> <li>・声が出るようになってきた。</li> </ul>

表11-2 目標達成の理由 [名(%)]

少しできた 33 (54.0%)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分からピアノに取り組むことで、改善できた。</li> <li>・学校でしっかりと練習が出来た。</li> <li>・高音部譜表や低音部譜表の読譜に自信がない。</li> <li>・スムーズな演奏とまではいかなかった。</li> <li>・弾き歌いをしても焦らなくなった。</li> </ul>

歌いをしていても焦らなくなった」などがあつた(表11-2)。できないは5名(8.1%)で全体の約1割の学生が達成できなかったという結果である。理由として「初心者のため、演奏が難しく、時間がかかった」「テ



ンポもわからないし、指も動かない状態が長く続いた」「ピアノと歌の音量バランスが難しい」「面倒になり、練習しなくなった」という結果である。面倒になり練習しなくなったという理由以外は、進度や演奏、練習に積極的に取り組んでいる（表11-3）。

- ⑤夏休み中のピアノ・弾き歌いの目標と目標を達成する為にどのように取り組みをするか、記入して下さい。ピアノの目標について、「ピアノ教本を終わらせる」「両手奏のレベルアップ」「毎日練習」「指が速く動くように練習する」「感覚を忘れないようにする」「左手

の練習」「標準バイエルの後半を練習開始」「ブルグミュラーに入る」という目標があげられた。取り組み計画として「コツコツと練習」「練習日を決める」「1週間平均30分練習する」「指のトレーニングを続ける」「さぼらない」「忙しくても練習時間を作る」「1日1回は練習する」「練習を習慣にする」という具体的な練習の仕方や積極的な取り組み方が示されていた（表12）。夏休み中の弾き歌いの目標は、「伴奏に負けない声で歌う」「子ども達の様子を見ながら、歌えるようにする」「テンポよく歌えるようにする」「歌っても崩れないように伴奏する」「課題曲の練習」であり、歌唱法についても、声量やイメージするテンポについて考えていた。取り組み計画は、「発声練習をする」「暗譜演奏をしっかりとする」「指使いを意識して練習する」「左手を重点的に練習する」「伴奏を完璧にして歌に集中できるようにする」「定期的に練習をし、ミスの無いようにする」である。歌唱の方法だけでなく、伴奏についても練習や取り組み方を示していた（表13）。

表11-3 目標が達成できない理由 [名(%)]

できない 5 ( 8.1%)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者のため、演奏が難しく、時間がかかった。</li> <li>・テンポもわからないし、指も動かない状態が長く続いた。</li> <li>・ピアノと歌の音量バランスが難しい。</li> <li>・面倒になり、練習をしなくなった。</li> </ul>

表12 夏休み中のピアノの目標と取り組み

目標	取り組み計画
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノ教本を終わらせる。</li> <li>・両手奏のレベルアップ。</li> <li>・毎日練習。</li> <li>・指が速く動くように練習する。</li> <li>・感覚を忘れないようにする。</li> <li>・左手の練習。</li> <li>・標準バイエルの後半を練習開始。</li> <li>・ブルグミュラーに入る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コツコツと練習。</li> <li>・練習日を決める。</li> <li>・1週間平均30分練習する。</li> <li>・指のトレーニングを続ける。</li> <li>・さぼらない。</li> <li>・忙しくても練習時間を作る。</li> <li>・1日1回は練習する。</li> <li>・練習を習慣にする。</li> </ul>

表13 夏休み中の弾き歌いの目標と取り組み

目標	取り組み計画
<ul style="list-style-type: none"> <li>・伴奏に負けない声で歌う。</li> <li>・子どもたちの様子を見ながら、歌えるようにする。</li> <li>・テンポよく歌えるようにする。</li> <li>・歌っても崩れないように伴奏にする。</li> <li>・課題曲の練習。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発声練習をする。</li> <li>・暗譜演奏をしっかりとする。</li> <li>・指使いを意識して練習する。</li> <li>・左手を重点的に練習する。</li> <li>・伴奏を完璧にして歌に集中できるようにする。</li> <li>・定期的に練習をし、ミスの無いようにする。</li> </ul>

#### IV 考察とまとめ

本研究は、ピアノ学習初心者へMLシステムを活用した指導と実践のアンケート調査から学生の音楽力向上とその指導法について考察する。

入学前の鍵盤楽器の学習経験や状況のアンケートでは、鍵盤楽器の学習経験がない学生は約70%、学習経験がある学生は約30%であった。うち、学習経験年数が10年未満の学生は約70%に及び、現在も学習継続中の学生はいるが、ピアノを学習した経験がまったくない、経験が浅い、経験があってもやめてからの経過年数が長くブランクがあるなど、ほとんどが初心者であった。この結果から、幼稚園や小学校において鍵盤ハーモニカの学習経験や音楽科目の授業での学びはあるものの、将来、保育者・教育者を目指す学生であっても、ピアノ学習の経験や継続には繋がっていないことがわかる。保育者・教育者は音楽を表現する力・鑑賞する力・聴き取る力の知識と技能が必要とされる。教育現場で指導や教育に使用される鍵盤楽器は、ピアノが主流となっており、奥田<sup>(3)</sup>は、教育現場では、ピアノ演奏技能が基本的能力として強く求められていると指摘している。また、荻田<sup>(4)</sup>も幼児・初等教育の現場において、実際に子供とかかわり、指導者が音楽の楽しさや喜びを子ども達に伝えていく時に、その音楽の中心的な楽器として従来からピアノが用いられてきたこと、そして伴奏楽器としてもピアノは最適であり、幼児・児童への指導を志す者は、ピアノ演奏の技術を習得するために、十分な練習を積むことが要求され、鍵盤楽器、とりわけピアノ演奏の必要性を述べている。

前期実技試験前に行ったアンケート調査から、ピアノを学習するうえで難しいと感じていることは、両手奏、指使い、指が動かない、4指5指のタッチが弱い等、弾くことに関係したことが大半を占めた。ピアノ学習が初めての学生は、演奏に直結する技術や操作性に難しさを感じており、達成目標にも操作性に言及している学生が多かった。澤田ら<sup>(5)</sup>はピアノが弾けるということは、将来、こどもと関わる中で音楽の楽しさを伝えることや豊かな感性、音楽表現を引き出すための有効な手段の一つであると述べている。また、山本ら<sup>(6)</sup>は現職小学校教員の授業実践を検証しており、教育の現場では、準備や片付けなどの行動を言葉による指示ではなく、音楽を感じて動くこと、効率よく支持を通すための工夫として、「合図」や「霧井気づくり」のためにピアノを弾くという例も挙げている。このように、授業のみならず、日々の学校生活の中でも、音楽、特にピアノ演奏が多用されており、保育者・教育者の豊かな表現力や発想力で演奏することが求められている。しかし、ピアノ学習初心者にとっては、演奏するための基本的技術や操作の習得のみに終始しているのが現状であり、表現する力や聴きとる力・鑑賞については、さらに知識や技術力を深めなければ実感する余裕のないことが考えられる。

音楽実習Ⅰでは、MLシステムを導入した指導を行っており、弾き歌い・歌唱指導、自主練習、個別指導からなる3つのグループに分けた指導を展開している。ML教室では、弾き歌い・歌唱指導のグループと自主練習のグループの集団指導を行い、隣接しているML指導室では、もう1つのグループの弾き歌いとピアノ楽曲の個別指導がある。学生たちは、毎回、90分の講

義で集団指導と個別指導の両方を学習している。

個別指導では、練習してきた曲名や練習目標を進度表の記入から確認し、学生個々の進度に合わせた指導をしている。また、1つのグループ全員が入室し、学生同士がお互いのピアノ演奏や指導を聞きあうことで相互に学習することができる。さらに両手奏に重点を置いた指導をするなど、教育現場で必要となる技術の習得に取り組んでいる。

ML教室での集団指導は、16台の電子ピアノにそれぞれヘッドフォンが配置されているので自主練習と弾き歌い・歌唱指導の2つのグループの指導が可能である。自主練習では、ピアノ演奏の操作性に不安や困難を感じている学生は、その場ですぐに指導者から直接指導を受けることができ、個別指導の受講前後に自らの振り返りや、予習・復習に時間を充てるなど、練習意欲が続くような取り組みも実践している。

実際の教育現場での弾き歌いは、ピアノ演奏をしながらの指導となるが、園児や児童の様子や状況に合わせて、テンポの調整や表現・即興性など臨機応変なピアノと歌唱の高度な技術力が要求される。平井<sup>(7)</sup>のピアノ弾き歌い指導法の先行研究においても、弾き歌いは学校の音楽授業に不可欠な要素として、その技能が教師に求められるとしている。教員養成課程で学ぶ多くの学生は、ピアノ演奏に関して初心者であることが多いので、合理的で応用可能な指導をしなければならない。ピアノ初心者の学生にとって、左手での演奏が最も難関となっていることが、指導の結果から明らかになり、右手は歌のメロディーを演奏することが多いため、歌に従うことで、耳で聴きながら音やリズムを確かめ自力で徐々に上達することが可能である。しかし、左手の伴奏は、右手と全く異なるリズムパターンと音程である。そのため、右手と左手を別々に動かすことの難しさという問題に直面しており、合理的で応用可能な簡易伴奏が最も有効な手段であったと述べている。音楽実習Ⅰでは、弾き歌いの指導として、歌唱や曲の背景の指導と共にメロディーの階名唱を取り入れ、読譜力と視唱力の向上に配慮した。また、歌詞のひらがなを漢字に書き換える、現在ほとんど使われていない言葉の意味を理解する指導など、表現を導くための一助とした。金指<sup>(8)</sup>は、階名唱と歌唱、リズム唱の導入により安定したピアノ演奏と歌う事の集中につながる。歌唱教材の多くは、音符の下にひらがなで歌詞が書かれているため、歌詞の内容をイメージするのが容易ではないことがある。歌詞を漢字交じりの文に書き直すことは、音楽の内容を理解するためには有効な方法であると述べている。伴奏付けは、ほとんどの学生が初めてであるため、主要3和音で構成した伴奏譜に取り組むことから始めた。進度によっては、原譜のまま練習に取り組んだ学生もいる。歌唱指導は、マスターピアノで弾き歌い曲の指導や発声指導の他に、学生が集団の中で演奏や指導をする時間を設けた。範唱や範奏をする中で、曲のテンポや拍子をとる指導や歌の開始を皆に促し弾き歌いをリードする指導などにも取り組んでいる。

アンケート調査より、前期の目標であった両手奏に慣れる、弾き歌いができるようになる、はっきり聴こえるように歌う、などは約90%の学生が目標を達成できたと回答しており、この結果は、伴奏の進行や構成など、楽典の指導や範唱・範奏を集団の中で積極的に取り入れ、目

標達成のより具体的で明確な指導と練習・努力を重ねた自己研鑽力の成果と言える。

ピアノ学習初心者への指導として、①進度表を活用し自己課題と目標を明確にする、②両手奏や部分練習など練習方法の指導、③ピアノ・歌唱指導、自主練習の体験、④主要三和音・コードを使用した伴奏の理解と実践、⑤MLシステムを活用した集団指導と個別指導の学習体験、⑥演奏することへの向上心を失わずに練習意欲を根気よく維持するための学生へのサポート、これらの指導を総合的に実習・実践したことにより、音楽力を向上させることができたと考えられる。

しかし、目標を達成することが出来なかった学生も数名いた。これは、演奏するために必要な音楽の知識や基本的動作の経験が浅いため、思うように学習結果が得られず、苦手意識が生まれ、学習意欲が減少していく傾向にあったのではないかと推察する。指導者は、学生に目標達成の為に有効な学習方法を明確にして、技術力の向上を導き、苦手意識の解消を促すことにより自信を持って演奏に臨めるよう、工夫して指導することが必要である。ピアノ演奏や歌唱、弾き歌いの音楽力向上は、個々の練習や努力が求められるが、個々の問題だけで捉えるのではなく、どのような指導や支援を学生達が求めているのかを、MLシステムの活用を通し、今後さらに検証していきたい。

## 引用・参考文献

- (1) 最新 初等科音楽教育法「改訂版」小学校教員養成課程用 p15, p68
- (2) 小倉隆一郎 ML授業におけるレッスン・カリキュラムの見直しとその効果「教育学部紀要」文教大学教育学部 第43集 2009年／田中功一、小倉隆一郎、鈴木泰山、辻靖彦 保育者養成課程のピアノ初心者を対象とした演奏見える化ツールの活用実践
- (3) 奥田昌代 保育者における、ピアノ伴奏技能向上の試みⅡ大阪信愛女学院短期大学紀要 第43集 (2009) p29
- (4) 荻田泉 幼児・初等教育の指導者養成におけるピアノ指導法の研究－初心者者の学習意欲を高める教授法について－四天王寺大学紀要 第53号 2012年3月 p215
- (5) 澤田悦子、橋本卓三 ピアノ学習導入期の現状と課題－器楽Ⅰの調査から－北翔大学短期大学部研究紀要 第5号 (2013) p43
- (6) 山本祐子、小杉裕子 小学校教員養成課程のピアノ指導を考える－現職小学校教員の授業実践の現状に着目して－椋山女学園大学教育学部紀要 5:35～45 (2012)
- (7) 平井李枝 教員養成課程学生に対するピアノ「弾き歌い」指導法の研究 宇都宮大学部教育実践紀要 第2号 pp.91-92, p98
- (8) 金指初枝 弾き歌いに関する一考察－教育実習事前指導の観点から－埼玉学園大学紀要(人間学部編) 第9号 pp199-206 2009